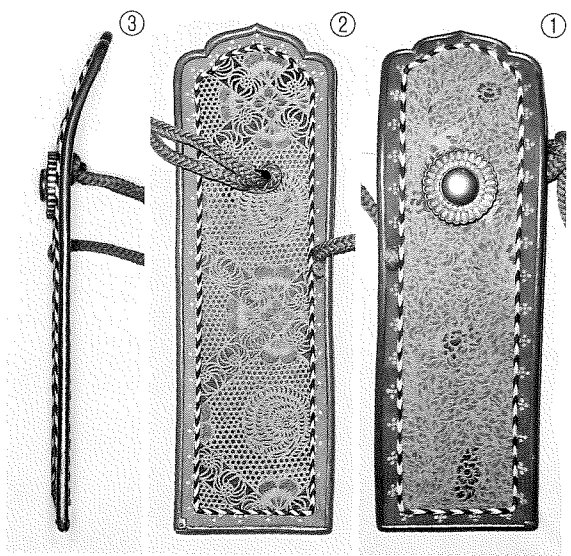


〔連載〕 武蔵御嶽神社宝物シリーズ23  
国指定 重要文化財 紫裾濃鎧の鳩尾板

日本風俗史学会会員 齋藤 慎一  
前青梅市文化財保護審議会会長

鳩尾板は、大鎧の胴の弓手（着用者の左側）の隙間を防禦する細長い鉄板です。馬手（右側）の梅檀板と一对で、梅檀より幅は狭く作られます。鳩尾と梅檀は一般的に年代の下降と共に小型化し、胴の



紫裾濃鎧の①鳩尾板 ②その裏面 ③側面の反り

裾すばまりの造形に連動し、あるいは先立って、下方へ幅が通減する傾向です。御嶽の紫裾濃は、胴の長側四段（胴周り）の数も下方へ増し、裾はひらき気味ですが、赤糸などに比較すると、ずっとひき

しまった感じですが、その造型の印象に沿って、紫裾濃の鳩尾板は下辺を少し狭めて、裾すばまりの年代を先取りしているのは注目すべきです。先行する黒糸も同じです。（梅檀の下辺は小札の収縮も考慮した上です。）紫裾濃の主体部分は鎌倉中期の初

頭の制作です。鳩尾・梅檀の寸法を平安末期の①御嶽の赤糸威、鎌倉初期の②厳島神社の黒糸威、③紫裾濃と比較しましょう。（）の中は梅檀の寸法で、高×上幅（梅檀は冠板下辺）・下幅（同菱縫板）です。①赤糸威は28.3cm×7.63cm×7.98cm（29.5cm×11.4cm・11.7cm）。②黒糸威は25.7cm×7.7cm×7.2cm（25.7cm×12.0cm×11.5）。③紫裾濃は25.4cm×8.26cm×8.17cm（23.3cm×11.3cm×10.9cm）。

一般的縮小の傾向に対し、紫裾濃の鳩尾の幅が広いのは注目されます。赤糸の梅檀と鳩尾のバランスに対して紫裾濃の方に安定感があるのはこの幅の広さによります。作者の造型感覚でしょう。また梅檀と鳩尾の両方に同じ据文金物を飾る様式は、御嶽の赤糸が最古の例で、鎌倉中期に一般化します。鎌倉初期の大三島の紫綾威の車輪文の据文金物につづき、鹿兒島鶴ヶ嶺神社の赤糸威、やや遅

れるのが御嶽の紫裾濃です。紫裾濃の鳩尾の腰高の五重の鋤出彫り菊座の据文金物は、中心の山形から8.7cmほど下に穿たれた穴に金銅の根を裏へ通し横に割りひらき包韋の下で止めます。径は菊座3.55cm、次の菊座2.55cm、小刻座1.90cm、同1.84cm、以上は鍍金で、鍍銀の笠鉾は1.7cmです。全体に古色はありますが、菊座二重部分、兜の眉庇に残る古い据文の鋤出彫りの手法と一致しません。しかし明治三六年新補の梅檀の据文ともちがうので、古い年代の補作でしょう。この金物は「集古十種」や明治三六年撮影の旧状写真でも残っています。笠鉾は古物です。据文は全高1.0cm、菊座の縁は、角だつて腰高です。

周囲の覆輪は鍍銀で、下地は鍍金、地金は山金です。鍍銀は大分剥落しますが、外側の下隅の四角な鼻（花先）をつけて釘止めした辺によく残っています。覆輪の止め方

は、御嶽の赤糸のように①下辺（縁）の中央と、②内側の下隅での止め方と、③外側の下隅止めの三種類ほどが主なところですが、紫裾濃は、③の古い例です。

表側の五星赤韋、紺白紫の伏組、藻獅子の絵韋はすべて明治修理の新補です。しかし、据文金物の周囲にごく僅かながら古い消えかかった藻獅子文様の絵韋が残っています。

「集古十種」には、現状に類したの輪郭で「韋少シ残、白地筋如紫色。古色不分明」として縦縞を描きます。この記事については、明治二三年七月二〇、二一日登山、実見した川崎千虎が「集古十種」二

八）鳩尾板に堅すぢの革の残りたるやうに描きたれど全く獅子の画革にて」（縮写集古十種 第二卷 甲冑之部 附図説）東陽堂支店・明治三五年刊）と藻獅子韋であったことを報告しています。この藻獅子文の絵韋の残欠は眉庇、

梅檀板にも同じく摩耗した状態に残っています。摩耗する以前の藻獅子韋の図様は、胸板下になっていた残欠を明治三六年の修理で引き出して弦走の上部に使用しています。前立拳の化粧板に沿って残る藍色鮮明な牡丹の葉文（藻」と通称）部分がそれです。

鳩尾、梅檀、眉庇の藻獅子文、そして弦走の上部にそのすぐれた図様の旧状を残す藻獅子韋の残欠。かくて、初期のくずれのない藻獅子文絵韋を使った最古の例がこの紫裾濃鎧ということになるのです。そして以後、この藻獅子文絵韋が鎌倉中期以降の絵韋の主

流となつてゆくのです。次は鳩尾板の裏面です。五星赤韋の小縁、紺・白・紫伏組、牡丹襷獅子丸の絵韋もすべて明治新補です。本来は梅檀の冠板や胸板の裏と同じ、古様の五星赤韋に紺白紫の伏組、牡丹襷文獅子丸絵韋でした。表から裏へ通した据文金物

の割根から1.0cmほど上に、縦径1.5cm、横1.8cmで厚0.37cmほどの鉄の横鐙を打って、上の高紐の根に結びつける新補の赤の丸打の付緒を、二つ折にしてつけています。鐙の根は表へ通し、据金物の内側でひらいて止めます。

一方表から見て内側の小縁に、下縁からその小穴の中心まで14.1cmと13.3cmの縦の位置に一对の小穴があつて、付緒と同じ新補の赤の丸打の控の緒が一条出ています。本来は「集古十種」も描くように、下縁から7.6cmと6.6cmのところにもう一对の小穴があり、ここから一条の緒を出して、上の緒と結び、高紐へ通すか、結んで、弓射の打上のような動作の折に鳩尾板が翻るのを制禦したものでした。しかし下方のこの一对の穴を明治修理の際、小縁の五星赤韋で覆つて、緒も出しません、一对の穴があることは確認しています。

また側面から見るこの鳩尾

板は、付緒の鐙、上端から7.5cmのあたりで、1.7cmほど胸もとになじむようなほどよい曲線で内側に反ります。この反りは古い年代ほど強く深く、年代下降と共に浅くなります。先行する御嶽の赤糸で3.5cm、厳島の黒糸では2.0cmです。一方、年代の下降と共にあらわれる、下辺部の外反りは紫裾濃にはまだありません。少し下降して、鎌倉後期の厳島の浅葱綾、末期の細川家白糸威棲取鎧などにはありません。鍍金の上に銀をかけた鍍銀、すなわち白覆輪と紫裾濃という配色の糸威、鋤出彫り腰高な菊文の金銀の据金物の鎧、優雅な王朝趣味と端正な鎧にふさわしい鳩尾板です。重量は緒共に三六〇gです。

本稿引用の甲冑の計測値、観察は、山岸素夫先生に随行、調査の学恩です。同時に同門の多くの友人の示教、助力によるものです。